疎

開

和田国民学校児童の疎開先（布施坂井公会堂　昭和36年撮影）〈提供　高山都規子さん〉

疎開

●上荻一丁目
嶋田　いね
（明治四三年生まれ）

三女史子の出産の折、昭和一六年一二月一六日だった。電気の傘に黒い布をつけて警報の知らせがあるとその布をおろして、表から明りが見えないようにしておりました。

昭和一九年八月、夏休みを利用して田舎の義父の病気見舞に長女、二女をつれて主人が滋賀県へ行っている留守に大きな荷物をしょって横浜の母が来ました。母は『家の前に防空ごうを作ったけれど、紋付はだめにしてしまうと困るから荻窪の家にあるものと一しょにしておいてもらいたい。親類が一しょにつかう物だからね』との話をしました。

そんな話をしている折「若杉国民学校から電話で、学童疎開と縁故疎開のどちらかにきめてすぐ返事をとの事で、すぐに電話で主人に返事をもとめましたところ、しばらくして主人の妹が二人を預ってくれるとのことで、そのまま田舎にあずけて来ました。

荻窪の歩道には通行人が一時入る防空ごうが出来ました。警報があるようになり庭に造りました。報があると急いで二階へ上りまどのガラス戸を風が通りぬけるよう開け放って、一升びんの玄米に竹の棒を入れて、御近所の方も一しょにごうに入りました。何事もないのを願って。

一〇月になって主人が松茸狩りのころに（一〇月）滋賀の里へ子供を見ながら行きまして帰りに二女が東京へ帰りたいと涙をためていたけれど、「姉ちゃんと二人でじき迎えにくるから」となだめてかえって来ました。

一二月三日の荻窪駅の先の陸橋（りく）に空襲があって、たくさんの方がなくなり、主人は死体を片づけて帰りました。とても子連れでは暮せないと思い、湯河原へ疎開することにしました。私は子供を背おってこんだ汽車にのり裏の奥様と御一しょしました途中、裏の奥様の里（茅ケ崎）で一夜の宿を提供していただき、翌朝湯河原へ行きました。食糧不足の折、また『さつまいも』をもとめに来ます、と御礼を言って別れました。

何日かたって「さつまいも」を買いに行き駅まで来ると警報がなりひびき、さつまいもをそのホームにおいて帰りました。荻窪、湯河原、滋賀県と三つに別れていては大変であり、

特に湯河原は海辺であぶないと思いました。忘れもしない二月一八日に早朝滋賀にゆく汽車にのりましたが、静岡当たりで空襲のため汽車をとめられてしまったので、静岡の町の私の知りあいを尋ねて一時休ませてもらいました。夕方発車を待って米原へ着いたのは夜中で寒い一夜を過しました。主人は毎月のように汽車の切符が手に入ったといっては、滋賀のほうに来てくれて長女、二女の学校に行く姿を見て安心して、荻窪へ帰り仕事についておりました。しかし八月に入ってだんだん事態がけわしくなってきたので、一寸こられないからと言っていました時、八月一五日にラジオで天皇陛下のお言葉がありますからラジオの前で聞いて下さいとの事。何事かと思いましたら終戦のお言葉でした。

それからが食糧難いろいろありました。

思えば永い年月荻窪におります。区制が引かれて六〇年とありましたが、私どもは当時豊多摩郡井荻町の時分からこの土地を愛しております。駅も小さく電車の乗りおりも二、三人だったと思います。

戦争の時若い方々のおかげで自分等があると思うと毎日が御命日と思いお線香を上げてます。

学童集団疎開の回想

●高円寺南二丁目
鈴木　勝枝
（明治四〇年生まれ）

1　先発隊として。突如先発隊を命じられ、慌ただしく同僚M氏とともに疎開先を目指す。長野県西内村霊泉寺並びに鹿教湯の温泉地。事態はまさに急迫していた。早速未知の地、西内村の関係方面へ挨拶を了し、直ちに霊泉寺、鹿教湯へ直行。受入態勢を急ぐ。時は昭和一九年九月半ば残暑の日射しなお厳しく、奔走する先発隊にふり注ぐ。そのころ、太平洋戦争の形勢非にして空襲いよいよ厳しさ加え、首都学童の安全保護の一環として、未曽有の疎開大事業が展開されたのである。

2　集団疎開児童現地入り。防空服に身を包む杉一、杉七、杉九の三校の児童が信州山間の地西内小学校校庭に合同集結し、不安と緊張のうちに歓迎式に参列する。未だ暑さ残る青天の下、さしもの広い校庭も時ならぬ光景に埋め尽くされたのである。やがて三校児童はそれぞれ所定の学寮に向かう。想えば、児童にとって生まれて初めての経験、はるばる僻遠山間のこの地に安全な疎開生活を送ることとなる。

3　学寮生活はじまる。杉七、四年男五年女計七八名で構成される霊泉寺和泉屋学寮である。その他は鹿教湯に分散、担任教師N氏と小生、生活全般を担当する寮母三名、児童たちは物珍しげに山の生活を満喫してはしゃいでいた。温泉は溢れ、献立は計画によってすすめられるが、何もかも初めてのこと故児童はもちろん教師と寮母もそして宿屋側も、ただ手さぐりの状態であった。最初は学習に手が廻らず、日々の生活整備に明けくれの状態、幸い信州の空はさわやかに澄み、その中をかけ巡る児童にとってはよい楽園郷であった。

学習指導は週四日、宿舎内で座学形式、残り二日は地元西内小学校校舎を借り集団引率通学である。途中峠を越えて約三キロ、手ごろの運動距離である。児童は防空頭巾にモンペ又はズボン、教師は戦闘帽にカーキ色の戦時服、それにゲートルの扮装（ふんそう）で地元住民からも注目を浴びていた。

4　発熱児童寮内にひろがる。最初元気だった学童にも、一か月も過ぎるころから下痢を伴う発熱患者が現れ、日毎に数を増して行くさま、地元に医院はなく、遠く丸子町からの来診、投薬するも下熱しない。日々来診はあるが回復の気配

がない。医師すらなすすべもなく、「気持ちの落ち込みからくる一種の疎開病だろう」と名づけたほどだった。寮母さんたちの必死の看病も奏功せず遂に全員臥床。あたかも病棟と化す。

5　想い出ずる事の数々。ふと虱の発生をみると、瞬く間にひろがり、寮母さんの懸命の煮沸にも卵塊は屈せず、遂に全寮を覆う。座学の際児童の首すじや襟足を這い廻るさまは虱の行軍を想わせる。突然脱走事件起こる。夜中に寮を抜け出す者あり、教師二人、自転車にて連呼しつつ、後を追う。点灯の提灯も轍に転ぶたび消え、辛うじて友人の縁故先にて寝姿を発見、安堵する。真冬の深夜のひとこまであった。学寮の食糧も配給制度で、宿舎側に保管権が委ねられる事からトラブルも無かったわけではない。児童の自由散歩のある時、疎開児童が未熟の稲穂粒を弄んでいるとの住人からのお叱りをうける。親の疎開訪問が頻繁となり、噂が街にひろがるのを聞く。

6　霊泉寺から鹿教湯へ再疎開する。杉一が他へ越したためである。昭和二〇年四月、霊泉寺から鹿教湯へ再疎開し、本校児童すべて鹿教湯に統合される。疎開地で一学年ずつ進級し新学年を迎える。霊泉寺での七か月、心身共に成長する。村の農繁時農耕作業を手伝う。農耕馬と共にからだ中泥んこ姿での作業は生涯忘れられないことだろう。

7　玉音放送、雑音裡に終わる。山間地のためか雑音だけ耳をつんざき全然聞きとり難い。やがて現地の白衣の傷痍軍人により敗戦を知る。一同呆然自失、沈痛の想いに打ちひしがれた。

8　疎開解除し本校に引き揚げる。初めて味わう敗戦の痛手に足取重く、泣くものすら見受けられる。児童達はともかく懐かしの親元に帰れることで救われることであろう。寮内は重苦しく沈んだ空気に包まれ、虚脱状態であった。長い間お世話になった宿舎に別れを惜しみ、丁重な見送りをいただき、昭和二〇年一一月中旬ようやく本校に戻ることができたのである。ほぼ三分の一を焼失した校舎の姿はみるも哀れ、敗戦を物語るように残骸をさらしていた。寒さに向かう折ではあったが、燃料もなく焼けぼっくいの黒焦げを燃料とし、天井板もない寒々とした教室で学ばねばならない。児童数五〇〇、戦前の三分の一、世相は混乱と無秩序に陥り、空前の食糧難時代となる。

9　疎開事業一〇周年並びに二〇周年を迎える。昭和三〇年疎開事業一〇周年を迎えるに当たり、疎開先訪問の命を受け区長さんからの感謝の記念品を持参し、宿舎ごとにその旨を述べこれを贈呈する。同じく二〇周年にも同様の訪問をする。疎開当時、共同浴場の鹿教湯にもそれぞれ内湯が設けられ面目も一新する。各旅館主も世代交代して、いずれも若主人になっていたのにはさすが今昔の感を抱いた。霊泉寺にて疎開談に夜を更かし、好意を胸に辞したのであった。

戦争と母、そして疎開

●世田谷区上北沢四丁目
高山　都規子
（昭和九年生まれ）

私の生みの母は、父や私たちの看病のかいもなく、三九歳の若さで一六歳の姉を頭に四人の子供を残して先立ってしまった。昭和一六年五月二五日のことだった。

その後親戚の人にお世話になっていたが、二年後の昭和一八年四月二五日、父は良縁があり再婚をした。「明日からはお母さんと呼ぶのだよ」と父に言われ、私たちは素直に「お母さん」と呼んだ。しばらく「お母さん」という言葉を使っていなかったので、ちょっと言いにくかったが、母はとまどいながらも嬉しそうであった。母は三八歳、父と一三歳違っていた。聖路加病院で永い間看護婦をしていた。丙午で大変強い人であったが、ものすごい熱意のある温かい人だった。新婚生活七か月目、父に赤紙が来て老兵としてフィリピンのミンダナオ島に出征してしまった。そのため、若い母は四人の子供を自分一人で育てることになった。しかしこのことは、母と私たち子供との密接な親子関係が、成立することになるきっかけだった。お互いにこの非常時に協力し合わなければならないから。

食糧難で、庭に畑を作りいろいろな野菜を植え自給自足をした。戦火が激しくなり、庭に兄と二人で防空壕を掘った。一つは簞笥（たんす）を入れるため、もう一つは狭いけれど充分生活の出来る空間を掘り、電気もつけられた。

兄は防空壕掘りの名人だった。母は戦地にいる父に毎日便りを書いた。父からも日本に残した母と四人の子供のことが気がかりで、ナンバーをふって便りが来た。戦争が激しくなり、お互いに便りが着いたり着かなかったり、途中で飛行機が撃ち落とされたりしたのかもしれない。陸軍の航空便ハガキは、後に母がきちんと保管し、皆にかかわるハガキをそれぞれに分けてくれて、お互いに大切にしている。父から私の疎開の事も心配して、静岡の親戚に縁故疎開させたらどうかと書いてきている。でも私は縁故疎開はせず、集団疎開を選んだ。

和田国民学校も昭和一九年九月、第一回目の学童疎開が始まったが、五年生の私は二回目の昭和二〇年五月六日、二年生も加わって、長野県南佐久郡布施村拔井の宝温寺に疎開を

した。母は私の荷物、衣服等に小さな白いメリヤスのシャツ、晒などの布切れに、住所、名前、血液型、縁故先などを筆で書き、縫い付けてくれた。疎開する学童たちは、親に連れられ、それぞれ荷物を持ち校庭に集まって来た。

低学年の子は、意味が良くわからないから、遠足気分ですぐにでも帰れるように思っている様子だった。親元を離れ、見知らぬ土地で生活をしなければならない。いつまでか分からない。今の子供たちには理解してもらえないかも知れない。信越線で田中まで行くのだが、途中碓氷峠あたりで空襲があり、しばらく汽車は止まり、やっと田中駅に着いた。駅から寮まではトラックの荷台に乗せられ、うす暗くなるころ着いた。

村人たちは私たちのことを不憫に思っていた様子で、お赤飯と切りいかの甘い佃煮等出して歓迎してくれた。牛が「もうー」と鳴くとびっくりして「あっ空襲警報だ!!」と思う位敏感だった。寺はそれ程広くはないが、庫裏の一階が先生、二階が生徒、公会堂の一階が食堂、二階は教室になっていた。一番大事な基礎の勉強の時に充分に勉強が出来なかった。一時間近く歩いた小学校に挨拶に行った。食糧難は更にひどくなり、お米はほんの少ししか入らない。雑炊、スベリヒュウ、アカザ、ノビル、山牛蒡だの野草が多かった。蛋白源は男の子がよく取って来たイナゴを炭火に入れ、焼いて食べた。親たちが都合をつけて訪ねて来てくれた。他の子供の親から依頼された品物を持って来てくれたが、先生の点検にあい自分たちの口に入らない場合もあった。東京生まれの私は自然がいっぱいで、戦争といういやな時代でなかったら、本当に良い所だと思った。

寮母さんは一八歳から二二歳位の若いお姉さんたちで、とても良く面倒を見て下さった。私たち上級生は下級生の世話をし、シラミが大発生し大さわぎ。頭髪を櫛でとくとバラバラとシラミが落ちた。それをつぶすのが上手になるくらいだった。それから、下着などの衣服を鍋に入れ、煮てシラミを退治した。六月に赤痢の病人が出て、何人かが入院、私は病気にならなかった。それから生水はいっさい飲めず、ゲンノショウコを飲まされた。近くの農家に二人一組で農作業、桑の木の皮むきなど手伝いに行き、色々ご馳走やお土産をもらって来た。枝豆を枝ごとゆでて食べさせてくれた。男の子は寮に帰るまでにもらった土産を全部食べてしまった。

待ちに待った母がやっと訪ねて来てくれた。切符を手に入れるのが大変な時だったから。割箸に水飴をからめて「たっぷりお食べ」といってくれた。嬉しかったし、おいしかった。翌日寮母さんにおにぎりを作ってもらい、母を途中まで送って行った。無事の再会を祈って別れ、ふりかえりふりかえり、泣きながら寮に帰った。

その翌日八月一五日終戦になった。裏の農家の庭で、天皇の終戦の詔勅放送をラジオで聞いた。やっと東京に帰れると思ったのになかなか帰してもらえず、一一月にやっと帰れた。学校は五月二五日の東京大空襲で全焼していた。父も外地か

らの最後の引揚船で無事帰って来た。「一二月五日、浦賀に着く、周太郎」雨に濡れた電報が届いた。

その後も父は杉並区役所に永年務め、昭和三一年一月一三日六一歳で亡くなり、母も、所謂継母（ままはは）という言葉で片付けられる悲しい身の上だと言いながら誠心誠意私たちを育てあげ、父の看病もし、昭和四八年二月四日にこの世を去った。疎開先には何回か訪ね、当時の寮母さんたちと交流を持っている。